
イグゼキューター

秋山 時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イグゼキューター

【Nコード】

N7043I

【作者名】

秋山 時雨

【あらすじ】

迷える者を導く教会とは反対に、迷える者を葬る教会。

通称、逆十字教会

そこに一般公開されていないエクソシストが存在する。

その中でも悪魔を祓うのではなく、悪魔を狩るエクソシストをイグゼキューターと呼ぶ。

プロローグ 01 (前書き)

誠に勝手ながら、作者の都合により連載予定であった「虎の眼」を削除させて頂きました。

本作品には、グロテスク・暴力的な表現（行為、言動）表現が含まれています。（1つのシーンとしては存在しませんが、性的な表現も含まれています）これらが苦手な方は、ご遠慮ください。

作中での描写のように殺傷行為を行うことは犯罪となります。どのような事態となっても当方は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

この物語はフィクションです。登場する人物・団体等は全て架空のものです。

（一部登場する実在するまたは実在した人物・地域等もございますが、あくまで設定上のものです）

本作品には悪魔などが登場します。このテーマは宗教・思想によって解釈が異なりますので、これによって不快感を感じられる方はご遠慮ください。

長々と書きましたが上記をふまえた上で楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ 01

「 それではM s . 神代、次に詳細ですが……」

ええ、と適当にあいづちを打つ私。

受話器ごしから聞こえる事務的な台詞。声の感じからして、相手は初老の女性だ。

私は今、春休みを利用して、イギリスはロンドンまで仕事をしにきているのだった。

それにしても ものすごく眠たい……

電話の彼女の言葉は事務的なくせに、その声にはとても落ち着きがあり、とてもやわらかい、まるで子守唄でも聴いているかのようだ。

落ちかけの臉をベッド脇にある備え付けの時計に向ける。

只今の時刻 深夜1時。

私の故郷、日本では朝の10時頃だろうか？

ちなみに、私は寝起きが非常に悪い。別に低血圧で朝に弱いと言う訳ではない、仕事の関係上、夜型の体質になってしまっからだ。しかも、長期の休暇ともなれば仕事を立て続けに入れてしまうので、どうしても昼と夜が逆転してしまう。

春休み期間の朝10時といえば、本来であればまだ寝ている時間だ。さらに私は、時差ボケと言うものに非常に弱いのだ、幾度となく飛行機の中で寝る努力をしたものの、窮屈なシートに腰掛けながらではどうも落ち着かず、寝ることが出来ない。

つまり私は、日本を発つてからほとんど寝ていないのだ。

「代！Ms・神代！聞いているのですか！？」

眠気で上の空の私に一喝が入る。

「えっ？ あーはいはい、大丈夫ですよ！ 町外れのアパートですよね？」

「まったく、お願いしますよ？」

「了解です」

顔の見えない彼女に苦笑いをしながら返事を返し、電話機に受話器を置く。

(あーやっと思意識が覚醒してきた……)

目を擦りながら洗面所へと向かう。

「取りあえず顔でも洗いますか」

蛇口からあふれ出す水を両手ですくい、顔全体に付ける。曆上まだ春とはいえ3月中旬、水はとんでもなく冷たい。雫が顔を伝い首筋へ触れると思わず身をすくめてしまうほどだ。

タオルで押さえつけるように顔を拭くと今度は部屋の中央へ、そこで愛用の黒いコートに袖を通して、昼に取った食事の残りである、温くなったオレンジジュースを一気に飲み干す。

「よしっ！！ 出発だ！！」

両手で頬を叩き、体に気合を入れ、ベッドの脇に置いてある、使い込まれ年季の入った革製の四角いカバンを持ち上げビジネスホテルの部屋を出る。

エレベーターで3階から1階へ向かい、フロントに一声かけてチェックアウトは完了。またのご利用お待ちしております、というボーイの言葉を背に受けてホテルを後にした。

ブログ 01 (後書き)

以前、初執筆・初投稿と書きましたが、最近になってブログだけ投稿した見つかりましたので訂正いたします。

見つかったものに各所に加筆、修正、変更を加え新たに投稿していくことにしました。

ご感想・ご指摘いただけたら幸いです。

今後とも宜しく御願ひ申し上げます。

秋山時雨

プロローグ 02 (前書き)

本作品には、グロテスク・暴力的な表現（行為、言動）表現が含まれています。（1つのシーンとしては存在しませんが、性的な表現も含まれています）これらが苦手な方は、ご遠慮ください。

作中での描写のように殺傷行為を行うことは犯罪となります。どのような事態となっても当方は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

この物語はフィクションです。登場する人物・団体等は全て架空のものです。

（一部登場する実在するまたは実在した人物・地域等もございますが、あくまで設定上のものです）

本作品には悪魔などが登場します。このテーマは宗教・思想によって解釈が異なりますので、これによって不快感を感じられる方はご遠慮ください。

長々と書きましたが上記をふまえた上で楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ 02

ホテルを出た私は、先ほど電話の彼女に聞いた場所へ向かう。

コツコツとブーツの音がロンドンの夜の街に響く、左手に持ったこげ茶色のカバンは街灯の光を浴び、深みのある光沢を放つ。

街は沈黙を守る……

いくら深夜といっても週末なのだから、遊び歩く若者や酔っ払いなどがいてもおかしくないのだが……

まるで、街そのものが死んでしまったかのような静けさ。

この静けさには理由がある。ここ数週間、ロンドンの街を脅かしている女性ばかりを狙った猟奇殺人事件のせいだ。

今判っているだけで、死者16人、行方不明者4人。被害者は、腹を裂かれ臓物をごっそりと持っていかれた状態で発見されている。なんとも残酷な殺し方、影すら掴めない犯人。そのため、スコットランド・ヤードや一部のマスコミでは、切り裂きジャックの再来だとか言われているそうだ。

今から5日前、私の元へ届いた一通の手紙にも事件のことが詳細に綴られていた。そして、最後の一行には『今回の猟奇殺人事件の処理を「神代 彩花」に命ずる』と記されていた。

「さっさと仕事を片付けて日本に帰ろつと」

仕事。

そう私の仕事は、俗に言う悪魔祓い師。世間一般的にはエクソシストと呼ばれるもの。基本的には建物、物、動物、果ては人間に取り付いた悪霊を祓うのがエクソシストの仕事だ。

聖書、聖水などを用いて悪霊を祓うもの、ここまでが最も知名度の高い一般的なエクソシストである。しかし世間には公表されないエクソシストが存在する。

一般的なエクソシストを下級、武器を用いて凶悪な悪霊を消滅させる中級、中級以下の仕事に加え、デビルハンターといったこともこなせる上級の3つのランク分けされる。また、上級エクソシストは、イグゼキューターとも呼ばれ、現在、全世界で現役のイグゼキューターは12人しかいないそうだ。

そして、これらを統括するのが、逆十字教会とよばれる組織だ。

逆十字教会とは、迷える者を導く教会とは反対に、迷える者を葬る教会、というところから逆十字教会と呼ばれる。簡単に言ってしまうと教会の“裏組織”みたいなものだ。

ここでは仕事を受け、悪霊を祓う。または消滅させ、報酬を受け取るといった至極簡単なシステムであるが、いわば完全歩合制な仕事である。

この逆十字教会は、カトリックの総本山と同じローマのヴァチカン市国に本部を構え、そこから世界各地へと支部とそれに関連した施設等を持つ。

さっきのビジネスホテルにしたってそうだ。逆十字教会の息がかっている。

ちなみに私はエクソシストとしては現在中級で、かつて最強のイグゼキューターと謳われた父を尊敬し、また、目標としている。

エクソシストである私が、この猟奇殺人事件に首をつっこむということは、今回の事件は人ならざる者が関与しているということだ。本来、その国で起こった事件ならば当事国のエクソシストが派遣されるはずなのだが、今回に限って、全員出払っていて人手が足りないらしく、わざわざ私にお鉢が回ってきたのだ。

初めは、断ろうと思ったのだが、成功報酬が、ことのほかよかつた。中級エクソシストに回ってくる仕事でも1、2を争う額だ。そして、イギリス支部の司教であるエドガー・チューダー・アーヴィングが 私を名指しで指名してきたからだ。

彼の配属は支部とは言え、逆十字教会内部では、いわゆる“大司教”と呼ばれるクラスに席を置く人物である。

そんな人に私は、自分の名前を売っておいて損はないと考えたのだ。

ブログ 02 (後書き)

ご感想・ご指摘いただけたら幸いです。

今後とも宜しく御願ひ申し上げます。

秋山時雨

プロローグ 03 (前書き)

本作品には、グロテスク・暴力的な表現（行為、言動）表現が含まれています。（1つのシーンとしては存在しませんが、性的な表現も含まれています）これらが苦手な方は、ご遠慮ください。

作中での描写のように殺傷行為を行うことは犯罪となります。どのような事態となっても当方は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

この物語はフィクションです。登場する人物・団体等は全て架空のものです。

（一部登場する実在するまたは実在した人物・地域等もございますが、あくまで設定上のものです）

本作品には悪魔などが登場します。このテーマは宗教・思想によって解釈が異なりますので、これによって不快感を感じられる方はご遠慮ください。

長々と書きましたが上記をふまえた上で楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ 03

「……っと、ここね」

そうこうしている内に目的地へと到着した。

電話の彼女の詳細によると、このアパートは鉄骨コンクリート作りで築45年の4階建て、各部屋3LDKの全体的に立派な建物なのだか、なにぶん古い建物なので老朽化が進み、今では廃屋となっているそうだ。

ざっとアパートを見渡してみる

建物は全体的にやや縦長で、ガラス窓はほとんど割れてしまっている。かつてはクリーム色だったと思われる壁は薄汚れており、ところどころに薄っすらとひび割れが走っている。出入口は向かって右側に一つ。

ぱっと見た感じ、どことなく日本の団地の作りにも似ていて、どこにもありそうな感じがした。

ただ、他と違うのは、まがまがしいまでに異質な何かを放っているという点だけ。

「……しっかし、いかにもって雰囲気ね」

本当にいかにもって感じがした……

心霊特集の番組に出てくる心霊スポットチックな建物だ。ここまであからさまに“それっぽい”と恐怖を通り越して唾然としてしま

う。

私は悪態をつきながら、左手に持ったカバンを地面に下ろした。カバンを横に倒して止め具をはずす。蓋を開けたカバンの中には、聖書や聖水、十字架といった基本的な装備品。そして、リボルバー

式の拳銃が収められている。

リボルバー式の拳銃を手取る。357マグナム弾を使用する、シルバーメタリックのコルトパイソン6インチ。私の命を預ける大事な相棒だ。

ロングバレルに357マグナム弾を私用するので、その反動は結構なものだ、女の細腕で扱うのはなかなか大変な代物だ。しかし、38口径の弾丸、38スペシャルを使用することにより、威力はマグナム弾に随分と劣るもの、比較的反動を極力軽減し、扱いやすいようにしている。

最近の拳銃はオートマティックで弾数も多く、プラステイックパーツで構成されている物もあり、非常に軽く女性でも簡単に扱うことができるものも少なくはない。

弾数も少なくリロードも遅い、しまいには、弾丸の威力を落とすまで使う。私にとってはデメリットだらけのこの拳銃にこうまでしてこだわるのは、父の形見の品であり、父から譲り受けた大切なものだからだ。

パイソンのシリンダを横に押し出し、退魔の刻印を弾頭に刻んだ。特殊な弾を6発込める。そして、予備の弾と聖水の入った瓶をコートの左ポケットへ入れ、最後にとっておきのお守りであるチョーカ―を首に提げて準備完了……

再び、カバンを左手に持ち、ふう、と一呼吸し、アパートの出入り口へと足を向ける。

ブログ 03 (後書き)

ご感想・ご指摘いただけたら幸いです。

今後とも宜しく御願ひ申し上げます。

秋山時雨

プロローグ 04 (前書き)

本作品には、グロテスク・暴力的な表現（行為、言動）表現が含まれています。（1つのシーンとしては存在しませんが、性的な表現も含まれています）これらが苦手な方は、ご遠慮ください。

作中での描写のように殺傷行為を行うことは犯罪となります。どのような事態となっても当方は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

この物語はフィクションです。登場する人物・団体等は全て架空のものです。

（一部登場する実在するまたは実在した人物・地域等もございますが、あくまで設定上のものです）

本作品には悪魔などが登場します。このテーマは宗教・思想によって解釈が異なりますので、これによって不快感を感じられる方はご遠慮ください。

長々と書きましたが上記をふまえた上で楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ 04

アパートに入って直ぐ、まず目に付いたのは正面の階段と1階の各部屋へと続く廊下、そして、右の側壁についた郵便受け、階段は建物の古さを現したかのように黒ずみ汚れ、奥へと続く廊下は薄暗く、突き当りまではつきり見えない。

郵便受けには、かつてこの住人であった人の名前が書かれた紙製のネームプレート。すっかり擦れて読めなくなってしまうている。

例の“奴”がいる部屋は、二階の角部屋。階段をゆっくりと上り始める。

かっくんかっくん、と私の足音はコンクリートの壁に反響され通常よりも大きく響く。最後の一段を上りきると、建物前で感じた異質の何かが“それ”へと変わった。

体の背面で受ける3階へと続く階段からの空気と、前面で受ける2階の廊下からの空気が明らかに違う。私は、そんな空気をいつものことだと気にもせず廊下を進む。

私の姿が月明かりで照らされ、薄暗い廊下に影を落とす。廊下を進むにつれ、“それ”は徐々に濃度を増す。

角部屋の前にたどり着いた。ドア越しにはつきりと感じる、悪しき気配……そして……

血の匂い。

「報酬相応の相手って訳ね……」

閉鎖された部屋から溢れ出す血の匂いに、中の様子は容易に窺え

た。おそらく中は血の海に違いない。中級エクソシスト程度に来る仕事内容の中では滅多にお目にかかれないレベルの相手だろう。

近くの壁にカバンを立てかけ、ドアノブに手を掛る。そして、ノブを右に捻りそのままドアを押し開けた。錆び付いてすっかり重くなったドアが、がこん、と音を立てて開かれる。

ドアをくぐると部屋の構造上なのか、直ぐにリビングへとたどりついた。

錆びた鉄のような血と肉が腐った臭い…こみ上げてくる吐き気を懸命に堪えて室内に視線を走らせる。

見つけた！

しかし、私が目にした“奴”は、私の予想と教会の報告にあった悪霊とは遥かに違った化け物だった。

そいつは、ぐちゃぐちゃ、と粘り気のある音を立て、覆いかぶさるように若い女性の上で臓物を喰らっていた。

(悪食)

悪霊とは、実体を持たず何かに取り憑きさまざまな害を及ぼす。今回も悪霊に取り憑かれた、野犬によって起こった事件のはずだった。しかし、今、目の前で人を食らっている悪食は、実体を持ち、自ら生き物を襲う悪魔と呼ばれる存在。悪魔は悪霊などとは比べ物にもならないくらい力の力を秘めた怪物だ。こいつはイグゼキューターの管轄だ。

背筋が凍りついた

歪な球みたいな顔がいくつも集合し、毒々しい一つの球状の体を

形勢している。その1つ1つに目はないが、その代わりに鋭い牙を持つ大きな口を備えている。大きさにして1メートル弱。その姿は教会の資料で見たことはあるが、実物を見るのは初めてだ。

幸い奴は食欲を満たすのに夢中で、こちらには気づいていない。

(しつかりしろ私っ！これくらいでビビってたら、イグゼキューターに、父さんのように成れっこないじゃない！！)

自分自身に怒鳴りつけ、恐怖で小刻みに震える体を奮い立たせ、強引に意識を前に向ける。その声に反応し、口元を真っ赤に染め、口元からは、腸だと思われる長い臓物をぶらつかせながら奴がこちらを振り向く。

腸をずるり、と嚼り上げると、悪食は私の胸の位置くらいまでゆっくりと浮かび上がり、新しい獲物を見つけ喜んでいるかのように、不快な声を漏らした。

次の瞬間、奴は私目掛けて、文字通り一直線に飛び掛ってくる。

「やってやるうじゃないのっ！！」

すぐさまパイソンを不気味な球体に向け、素早くトリガーを3回連続で引く。

マズルフラッシュと共に38スペシャルの乾いた銃声が轟く。しかし、全弾命中しても怯むどころか、さらに加速して突っ込んでくる。

「っ！！」

ありったけの力を右足に込め、左に頭から飛ぶ。

私が立っていた位置に激突した。コンクリートの壁が砕ける。まるで小爆発でも起こったかのように、アパート全体が揺れ動いた。まともにも食らったらひとたまりもない。

「つの野郎！！」

そのまま空中で振り向き、間髪いれずさらに3回トリガーを引く。しかし、無理な姿勢で発砲した弾は、まともな軌道であるはずもなく、3発中2発は壁に当たり、1発は奴を掠めるだけに終わる。

転がりながら着地すると、しゃがんだまま左のポケットに手を突っ込み、聖水の入った瓶と取り出すと、体勢を立て直しこちらに照準をつけた悪食に向かって力いっぱい投げつける。瓶は悪食の体に当たり割れ、聖水が奴の硬い皮膚を焼く。

肉の焦げた匂いと硝煙の匂いが混ざる。

悪食は地面に落ち、自らの体から立ち上る紫色の煙に捲かれ。フィルターを通したような、この世のものとは思えない声で悲鳴を上げる。この隙に、パイソンのシリンダを右手でスライドさせリロードに入る。

ポケットから取り出したクイックローダーを左手に持ったまま、シリンダのシャフトで 薬莖を押し出し、床に捨てる。そして、6発同時にリロード。このクイックローダーはリボルバー式の拳銃の最大の泣き所であるリロード時間を短縮することが出来る。

その間、約2秒。

息を吹き返したパイソンを苦しみもがく悪食に向け再び連射する。しかし、4発撃ったところで、苦し紛れに地面を抉りながら突進してきた。

全弾撃ち込むつもりでいたため、反応が遅れ突進を避けきれず、私の体は悪食の勢いだけで弾き飛ばされコンクリートの壁に叩きつけられてしまう。一方の悪食は勢い余って隣の部屋まで突っ込んでいった。

「あ、ぐっ」

一瞬だけ呼吸が止まり、次に激しい痛みが背中を襲う。体に力が入らない……

掠っただけなのにこのダメージだ。まともに食らったらひとまわりも無い。

どうやら、悪食の硬い皮膚に対して、38スペシャルでは致命傷を与えることはできない、ましてやあの突進力の前では無意味に等しい。

気力を振り絞り、壁を支えにしてどうにか立ち上がろうとするが、膝が震えてうまく立てず、その場にへたれ込んでしまう。

こちらの部屋に戻ってきた悪食は確かな手ごたえを感じ取り勝利を確信でもしたのか、不気味な口元を弛め、ゆっくりとその距離を詰める。

まだ、腕は何とか上がる……

(あきらめてやるものか!!)

首に提げたチョーカーをむしりとる。

残り、3メートル

震える手で、再びパイソンのシリンダを横に押し出し、薬莖を捨てる。

2メートル

空になったシリンダに1発の弾丸を込める……

1メートル

ハンマーを起こす……

口を開き奇声を上げ迫る悪食……

ゼロ！

「?!」

口内の不思議な感触に悪食は戸惑ったことだろう。それもそのはず、肉を喰い千切る筈だった口の中には、硬い銃身が入っているのだ。

「油断して、さっさと止めを刺さなかったお前の、負けだっ！」

一際大きな銃声が響き、奴の体には私の腕を楽に通せそうな位の風穴が開いた。

悪食は、不快に鼓膜を揺さぶる断末魔を上げ、その体は細かい白砂のようなものに分解されていく。

硝煙独特の匂いが鼻につく……

あまりの反動で手が痺れてしまっている、緊張しすぎて息が切れる。

「はあはあ……やっぱり……はあ……マグナムは違うわねえ」

あはは、と乾いた笑いが唇から漏れる。

そう、私が撃つたのは、357マグナム。私の“とっておきのお守り”だ。

357マグナムを牛革の紐で結びつけただけのチョコカー。それが文字通り私を守ってくれた。

357 マグナムの薬莖を取り出して、まだ燃えたばかりの炸薬の熱が冷め切っていない薄い金属部に敬意を賞しキスをした。

ブログ 04 (後書き)

ご感想・ご指摘いただけたら幸いです。

今後とも宜しく御願ひ申し上げます。

秋山時雨

プロローグ 05 (前書き)

本作品には、グロテスク・暴力的な表現（行為、言動）表現が含まれています。（1つのシーンとしては存在しませんが、性的な表現も含まれています）これらが苦手な方は、ご遠慮ください。

作中での描写のように殺傷行為を行うことは犯罪となります。どのような事態となっても当方は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

この物語はフィクションです。登場する人物・団体等は全て架空のものです。

（一部登場する実在するまたは実在した人物・地域等もございますが、あくまで設定上のものです）

本作品には悪魔などが登場します。このテーマは宗教・思想によって解釈が異なりますので、これによって不快感を感じられる方はご遠慮ください。

長々と書きましたが上記をふまえた上で楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ 05

「痛たたあ」

いまだ痺れが残る手で、お尻に付いた汚れを掃い、まだ少し体の芯に残った痛みを堪えながら立ち上がる。そして、悪食に食われ、見るも無残になってしまった女性の亡骸を見る。

見た感じ、私と同年代くらいの若い女性で、流れるようなブロードの髪、女性というよりは少女のようなあどけなさを残している。彼女の目は大きく見開かれており、襲われた瞬間の恐怖を物語っているようだ。

肉とともに、無残に喰いちぎられた洋服のデザインを見る限り、これから、彼氏との約束でもあったのだろう。

開かれたままの彼女の目を手で瞑らせ、

「アーメン……」

右手で十字を切り、簡単ではあるが弔いを施す。

「話が全然違うじゃない！ 後でがっちりと教会に文句言ってやる！！」

現場にいたのは悪霊ではなく悪魔だったという協会の情報ミスよ、彼女に対する哀れみと、対処の遅れた教会に怒りを覚えた私は、鼻息を荒げながらよろよろと部屋の出口へと向かう。

背後から硝子の割れる音。

恐る恐る後ろを振り返ってみると…

「……嘘……でしょ？」

目に入ってきたのは 悪食。

数にして4匹。

先ほどまでたった1匹ですら大変な苦戦を強いられたのに、4匹もいるなんて。しかも、今はもう予備の弾すら無く、もはやどうすることもできない。

迂闊だった。

悪食のような下級悪魔は必ずと言っていいほど群れをなして行動する。1匹葬った安堵から重大なことを忘れてしまっていた。

勝利を確信して油断していたのは私の方だった。

奴らは私をあざ笑うかのように声を上げている。

恐怖と絶望のあまり、その場に座り込んでしまっ。

「だめだ……」

食べられちゃうのかあ……痛いだろうなあ……せめて日本の大地で死にたかったなあ……彼氏くらい欲しかったなあ……そんなことが頭の中でぐるぐると回っている。

私はこの絶望的な状況に、すっかり生き残ることを諦めてしまった。

悪食たちは、奇声を上げて一斉に襲い掛かってくる。

(つつっ!!)

覚悟を決め、歯を食いしばり瞳をぎゅっと瞑る。

「さつきからぎゃーぎゃーと、うるせえんだよ!」

マグナムの発砲音とまるで違う轟音　醜い叫び声が鼓膜を揺らす。

「え?」

目の前まで迫っていた、1匹の悪食が体の下半分を残しはじけ飛んだ。

私の顔の横を通り伸びた、ガンスモークが立ち上る銃身。
後ろを振り向いたそこには

月明かりに照らされ、赤く光を放つ栗色の髪。

フードの付いた、黒いミリタリーダウンジャケット。

そして、手に握られた鋭く光を放つ、黒く無骨なオートマティックの銃。

そいつは、冷たい目で私を見下ろしこう言った。

「素人が。戦えないならひっこんでろ！」

プロローグ 05 (後書き)

プロローグ05にしてようやく主人公登場です。

ご感想・ご指摘いただけたら幸いです。

今後とも宜しく御願ひ申し上げます。

秋山時雨

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7043i/>

イグゼキューター

2010年10月25日20時48分発行